

◆モスクワ歴史散策◆

第二十三回：ヴォルホンカ通り

大矢 温

前回は裏手からプーシキン美術館までやってきたが、この美術館の正面をモスクワ川と並行して走るのが今回のヴォルホンカ通りだ。全長600mほどの短い通りだが、すぐ前に救世主ハリストス（キリストのロシア語読み）大聖堂があるので、一層短く感じられる。何といても世界最大の正教寺院である。高さ103mの黄金のドームを頂く巨大な白亜の殿堂が周囲を威圧している。



パトリアルシー橋から見た大聖堂

そもそもこの大聖堂、1812年の対ナポレオン戦争（ロシアでは「祖国戦争」）の戦勝記念と戦死者の慰霊のために建立された。当時のヨーロッパ最大の陸軍力を誇るフランス軍を撃退した、ということでロシアのナショナリズムは大いに盛り上がり、アレクサンドルI世の勅裁を得て建設が始まった。当初は現在モスクワ大学本館のある雀が丘に建立する予定で、1917年には皇帝臨席のもとで起工式まで行ったのだが、ほどなく工事は中断されてしまう。「地盤が弱かったため」（実際は建築技術が伴わなかったためらしい）という理由で計画が変更され、現在のヴォルホンカ通りで建築が始まった。1837年のことである（ただし実際に建設が始まったのは39年）。巨大な内部空間を装飾するためスーリコフ、クラムスコイら帝国美術アカデミーの芸術家たちも協力した。かくして多大な労力と資金を投入し、44年の歳月を費やしてこの大聖堂が完成したのは1883年のことだった。この大聖堂、単にロシア正教の主教座がおかれただけでなく、モスクワの新名所としてさまざまな行事の舞台にもなった。完成直前の1882年にはチャイコフスキーの序曲『1812年』の初演が行われたし、対ナポレオン戦勝100周年、ロマノフ朝300周年などの祝典もここで挙行された。単にモスクワにとどまらず、ロシアの国

民的なシンボルだったのだ。

ところが社会主義革命によってこの大聖堂の運命も一変し、ついにはスターリン時代の反宗教闘争の一環で1931年に破壊されてしまう（レリーフの一部は今もドンスコイ修道院の墓地の壁に使われている）。跡地に建築が予定されたのは「ソヴィエト大宮殿」。屋上に80mのレーニン像を頂く全高415mの高層建築である。ソヴィエト政権の威信をかけて1937年から大量の特殊鋼とセメントを投入して基礎工事が始まったのだが、ほどなく始まった第二次世界大戦（ロシアでは「大祖国戦争」）のために建設は中断し、建設資材は軍事物資に転用されてしまった。かくして建築が放棄されたソヴィエト大宮殿の基礎部分は巨大な円形の穴となってクレムリンから目と鼻の先に放置されたのだった。戦後、この穴を温水プールとして再利用することが決定され、1960年にソヴィエト大宮殿の土台穴は温水プール『モスクワ』に生まれ変わった。真夜中でも煌々とライトで照らされ、真冬でももうもうと湯気を噴き上げる「勤労者のための施設」の完成である。この影響はほどなく現れた。特に冬季、付近は湯気によって視界を遮られ、湿気によって周囲の建物の腐食が進んだ。特に筋向いのプーシキン美術館の貴重なコレクションがダメージを受けた。というわけでソ連崩壊後の1994年にプールは取り壊され、跡地には再び救世主キリスト大聖堂が再建されることになった。おりしも1997年がモスクワ850周年にあたったので、それを目指して急ピッチで建設が進み、現在の建物が出来上がった。地階に博物館と小教会を併設した以外はほぼ過日の姿がよみがえった。21世紀に入って、モスクワ川の対岸から大聖堂に向かう歩道橋（パトリアルシー橋）も完成した。機会があったら、ぜひお試しいただきたい。この大聖堂の歴史を振り返りながら渡れば感動もひとしおだ。（札幌大学外国語学部教授）

<新刊紹介>